

〈インタビュー〉「東は東、西は西」か？

—— 岸本美緒氏、近藤和彦氏に聞く ——

1993年1月28日、『クリオ』編集部は、岸本美緒・近藤和彦の両氏にお話をうかがう機会を得た。

岸本氏は中国明清期の経済変動の数量的研究を専門とされる気鋭の中国史研究者であり、経済行動のパターンや明末清初の社会変動の分析などを通じて、独自の斬新な中国社会像をうち出してこられた。両氏ともアジア史・ヨーロッパ史研究者の交流に意欲的に取り組み、モラル・エコノミー論を媒介に共通の土俵での対話を呼びかける論文を『思想』にあいついで発表され、大きな反響を呼んだ。本誌で西洋史以外を専門とする研究者にインタビューを試みるのは、今回が初めてである。

なおインタビュアーは、青木敦（東京大学・院、東洋史）、山根徹也（東京大学・院、地域文化）の両氏と伊藤の三人がつとめた。（東京大学・院、西洋史、伊藤滋夫）

1 人との出会い、学問との出会い

伊藤：のっけから不躰けな質問で恐縮なんです、先生方のそもそもの出会いはいつだったのでしょうか。まずはそのあたりからおうかがいたいんですが。

近藤：…お目にかかったのは東大にいらしてからでしょ。

岸本：そうですね。

近藤：ただ僕は名古屋大学にいたころ、森正夫さんという明清の経済史をなさっているエネルギーな先生が、「地域社会の視点」の関連で岸本さんのことを話題になさるのを幾度となく聞いていました。それから、お茶大にいらっしゃる山本秀行さんからもうかがってました。ですから僕がここの文学部に来たのはたった一年早いだけです、岸本さんがいらっしゃるとわかったときには嬉しかったですよ。

岸本：そうですか、なんだかずっと前からいらっしゃるような…。近藤先生は、まえに『思想』に、上・下のをお書きになりましたよね。

近藤：はあ、「1756～7年の食糧蜂起について（上）（下）」ですか。

岸本：あれは東洋史でも話題になりましたよ。それで、そのときに拝見しました。あれは、何年でしたっけ。

近藤：1978年の12月と79年の1月。

岸本：そうですか。じゃ、ずいぶん前なんですね。

伊藤：ところで、岸本先生が歴史学を専門になさろうと思ったのには、そもそもどういうきっかけがあったんでしょうか。

近藤：こないだ電車でちょっと伺ったときに、高校では漢文がお得意だったと。それで中国を研究したいとは思っていたけれど、歴史ということになったのはもうちょっと後だというお話でしたけれども。

岸本：すみません、よく覚えてないんですけどね。でも漢文が好きだったことは確かなんです。高校の漢文の教科書に載っているのは、唐代の詩とか『史記』とかでしょ。私は漢文調というのか講談調というのか、ああいうのにわりに自信があったんですよ。男どうしの黙契とか悲憤慷慨とか…

伊藤：「刎頸の交わり」とか？

岸本：そうそう、まさにそういうふうな世界なんです。やっぱり女子校でボーッと育ってますから（笑）、むしろ憧れるんですよ。（武田泰淳の）『司馬遷 — 史記の世界』とかいいなあと思っていました。大学に入って学問をやるというのは、こういうことなんだなあと思って…。大学へじっさい入ってあとで読み返したら、すごくヴォルテージが高くて驚いちゃいましたね。高校のときはあれがアカデミックだと思ってましたけど。

近藤：なるほど。

岸本：でも大学に入ると感じが違ってきたんです。私が入ったのが71年で、ニクソン訪中が決まるとか中国と西側との関係改善の時期でして、中国語を選択する人がバブル的に増えましてね、その泡沫のひとつとして入ったわけです。入ってみたら中国語の先生で工藤（篁）先生という方がいらっしゃって、なんというか特色のある先生で、「中国語というのはなめるように触るように読め」と言われるわけです。それで一字一字粘着的にテキストを読んでいくのも面白いなあと思ひまして、関心も天下国家大の話から、日常生活のディテールとか、わりあい細かい心理のひだとか、そういう方面に移ってきました。そうやってみると古代史の世界より、明清の方がそういう史料は圧倒的に多いわけですね。

近藤先生のほうは社会科学からお入りになったわけですよね？

近藤：いえ、高校生のころは翻訳小説を新潮文庫とか岩波文庫で読んでいて、よくわからないけどドイツ文学とかできるかなあ、って感じでしたよ。大学に入ったらヨーロッパ文学をやるか小説家になれればと思っていました。だって東大文学部で西洋文学をやるのは、芥川賞をとるためのコースだと思っていたから（笑）。

伊藤：大江健三郎—柴田翔路線ですね。

近藤：そう。ところがじっさい駒場で小説書いていろんなところに投稿しても、まるで相手にされないわけですよ（笑）。

岸本：ほんとに？　そういう原稿とか今はどうなってるんですか。

近藤：どうなってるでしょう（笑）…。で何度か無駄な努力をしたあげく、「しゃらくせー！」と、そんなのやめた（笑）。それから駒場の授業には、社会学とか社会思想史とか

政治学とかで面白いのがいくつかありましてね。折原（浩）さんとか、城塚（登）さんとか、政治学では『日本の政治』を書いた京極（純一）さん。西洋史の授業はただの一つもとらなかった（笑）。高校のときは日本史、世界史どちらも成績は悪くはなかったけど、そんなもの専門にするという気はなくて…。

で、いくつかの授業が面白くて、高校生の考えているようなセンチメンタルなものとは別のアプローチで、ヨーロッパの文化ないし文明に迫っていけるんだということを学びましたね。それからすんなりと — 文学部西洋史に進むかどうかは別にして — 、ヨーロッパの文明を歴史的に学んでいくということは自然に決まってきたんです。

伊藤：折原さんのもとで学んだのは、ちょうど東大紛争の前だったんですね。

近藤：66年に大学に入ったときからでした。折原先生とたまたま中学校が同じだったということもあって（笑）、最初は講義だけで、1年の途中から演習でマックス・ヴェーバーを読みまし、マルクス、デュルケームについても鍛えられました。先生も良かったし、一緒にいた連中がすばらしい人ばかりで、それでかなり眼を開かれて…。そのころヴェーバー学者として大塚久雄をはじめて知ったんですよ（笑）。それまではよく認識してなくて。「大塚久雄というのは今はとても面白いことをやってるけれども、昔はなんだかヨーロッパ経済史なんていうつまらないことをやっていたらしい（笑）」というので、『近代欧州経済史序説』を「まあ読むか」と読んでみたら、面白かったんですね。要するにいろんな先生方の講義のなかに、大塚さんやヴェーバーやマルクスがベースになってる発言がいっぱいあったわけです。日本の学問のベースとしてマルクス、ヴェーバーがあるということが、だんだんに分かってきた。

伊藤：でもマルクスとかヴェーバーはもっと前から読んでらしたんじゃないですか。

近藤：うん、少なくともマルクスは高校のときから大事だと言われたので、読みましたよ。でも高校生には難しくて分からない。『共産党宣言』はスローガンが並んでるだけで、ちょっと面白いと思わなかった。大学に入ってから『経済学・哲学草稿』を読むと、一種実存主義的なメンタリティをもった若い魂にとってすごく心を動かされるものがあるでしょ。あのころ『経哲草稿』をテキストにを使って講義をする先生は駒場に何人もいてね、それは面白かったですよ。折原さんもそうだし、城塚さんも、社会思想史の谷島（喬四郎）さんも、同じテキストについてコメントするんだけど、そのなかでいちばん深く読んでいて我々の心を動かすのはやはり折原さんでしたね。

青木：西洋史とは違って、僕たち中国史のほうでは、歴史という枠よりも、中国哲学・中国文学・東洋史という枠で括りますね。岸本先生はどうして中哲や中文でなくて歴史をやられるようになったのですか。

岸本：ええ、中国に関心があったと申しましたけれど、中国以外の歴史にもわりに関心があったんですよ、現代史に。私が小学生だか中学生のときに、よくテレビでレーニンとかウィルソンとかのフィルムを編集した偉人伝みたいなのをやってたんです。そういうの

を見るのが好きでね。当時私はわりに元気が良くて（笑）、ああいうのを見て自分も世の中の役に立ちたいと思ってたんじゃないのかな。そういう意味でもともと歴史に関心はありました。ただ大学で中国語クラスに入りますと、中国という方がつきあいでも中心になりますよね。どうして中哲、中文へ行かなかったのかなあ。ひとつには中哲・中文というのはセンスだけで勝負というところがありますよね。その点であまり自信がなかった。それに（東大）紛争のあとで中哲・中文は多少屈折していた感じがありましたね。むしろ東洋史の方が風通しが良いという気がしたということがあります。

山根：中国史のなかでも、時代として明清を選ばれたのはどうしてですか。

岸本：そうですね…、成熟しきった感じがなんとなくいいなあと。でも明清と決めたのは卒論を書くときでして、5月だか6月だかに卒論相談会を東洋史でやりまして、そのときに私は時代すら決まっていなかったんですよ（笑）。内心自分では20世紀の民国時代の農民運動に関心がありまして、それをやろうかなと思っていたんですけど、田中（正俊）先生のゼミで明清時代の地主の家訓をやったのが面白くて、明清もいいなあとと思って、「どっちにしましょうか」と先生にお伺いを立てたんですよ。そしたら「最近明清をやる人が少ないから、明清をやりたまえ」と言われて（笑）、それでめでたく決まったんです。

近藤：田中先生というとな、厳しい先生だとは聞いているし、講義でもそれなりに感じていたけれど、1974年に東大出版会から『近代中国研究入門』が出て、僕たちは院生のときに読んだんですが、まあ凄いですよね。「一期一会の覚悟でこれらの書籍文書を閲覧し…」とか、「生涯われわれは書生なのである」、「最後の清書こそ草稿作成の最高段階なのである」とか…。中国の社会経済史をいかに書くかという章のはずなんだけど、「論文たるものこう書くべし」という心構え論なんです。分野違いの者は、「フンフン、厳しい先生だなあ」と思いながら読めばいいわけけれども、中国近代史をやってる人たちは大変なんじゃないですか、こういう人が指導教官だと。

岸本：ええ、ですから東洋史の学生のあいだでは、「卒論を書くまでは読んじまいかん」と言い伝えられていまして（一同爆笑）、その通りやろうとすると書けなくなるから。でも田中先生は姿勢みたいなものに厳しい方ではありますけれど、お書きになったものと実際の感じはやっぱりちょっと違うんじゃないですかね。

近藤：田中正俊先生のお兄様がイギリス中世史の田中正義先生で、やはり謹厳実直な先生なんです。正義先生にはオールド・ファッションのマルクス主義が続いているという印象をもっていますが、正俊先生はどうなんですか。

岸本：そうですね、田中先生は原則的なところがありまして、マルクス主義的な方法をとっている先生のなかにも、新しい考えが出てくるとそれをなんでも受け入れてしまう先生もおられるわけですが、田中先生はそういう意味ではわりあい厳しいところがあったと思います。

でも原理原則でなんでも斬っていくというのではなくて、むしろ対象に生身で接したい

というロマンティックなまでの願望をよく表明されてましたね。ひとつはお若いころに明代の農民運動の論文をお書きになったんだけど、戦後で物もないころでお腹もすいて、夜を徹して書いてらっしゃるわけです。それでうたた寝しているとき、夢枕に明代の農民が立って、「頼りとするのはおまえだけだ」と言ったというんです。それもなぜだかフランス語で。

それからもうひとつは私が東洋史ではじめて田中先生にお目にかかったときに驚いたのは、あのゴッイ先生が「自分はこれから漆の小箱を磨くような仕事をしたい」とおっしゃるんですよ。つまりきわめて丁寧な仕事をしたいと。それからまた別のときには「赤い夕日と言うばあい、その赤さがどういう赤さなのかということを考えるような仕事をしたい」と言うこともおっしゃいましてね。そういう沈潜していくようなことにも関心がおありになったと思います。まあ法則をバシバシ当てはめていってそれで満足するような感じでは全然なかったですね。中国史の発展を論証すべきだという責任感がすごくおありになる反面でね。

2 戦後歴史学への懐疑

伊藤：さっき田中先生のゼミで家訓の話をなさったと伺ったんですが、卒論ではどういうことを扱われたんですか。

岸本：卒論では賦役制度なんてものをやりました。あれはなかなか大変でした。

伊藤：としますと、先生は経済史というか、土地制度史から入られたんですか。

岸本：はい、そう言えると思いますね。私がやった家訓というのは先行論文のなかで取り上げられていたものなんです。都市の商人が土地を買い集めて、農村の小地主が土地を手離していくというふうに、ヨーロッパにおけるブルジョワの地主的土地所有の形成と関係づけて論じられていたんです。でも私はヨーロッパとの比定にたいして必ずしもそういうふうにはいかないんじゃないかということを書いたんです。当初からヨーロッパ・モデルにたいして正面から異議を唱える物心は全然ついてなかったんですよ。でも今から考えてみますと、やっぱり自分のやり方は出ているような気はします。というのは、たとえば土地を売るなら売るにしても、それをブルジョワジーの土地集積というふうに大所高所から見ると、当時の人自身が具体的な状況のなかで——物価が下がったから土地を売るとか——どういう理由でそういうことをやったのか、ということに一貫して興味があるんですよ。土地制度というバーンとしたものがあってそこから見るんじゃなくてむしろ、個別の地主が経済生活をやっていくなかで、どういうつもりで何をやったのか、ということなんです。

伊藤：今の先生のお話では、現在のご関心とかなりつながってきますね。

岸本：そうなんです。でも当時は自分の方法を意識して何かをやるということは、ほとんどなかったんです。

山根：いつごろからヨーロッパ・モデルにたいする違和感を意識されるようになったんですか。

岸本：そうですね、やっぱり修士論文を書いているときに、だんだん固まってきたという感じはしますね。とくに経済史の方面ではこういうことでいけるんじゃないかなという感じはちょっとしたんですけれども。ただ社会史の方面では、まだどうしたらいいかわからないところがありました。そう意味で方向が見えてきたのは、本当にこの2～3年か、4～5年くらいですね。

近藤：中国経済史で先輩としては浜下（武志）さんがいらっしゃいますが、当時中国史研究者のなかで計量的なものを使おうという波みたいなのはありましたか。

岸本：そうですね、そもそも近代史のほうは田中先生ご自身、いろいろ統計とかお使いになってますし、統計を使う流れというものはずっとあったと思いますね。ただ明清でいうとそういうものは本当に少なかったというか、私が修士論文で物価のことをやったときには、「なんでそんなことやるの」って言われたこともよくありました。

伊藤：言葉は悪いですが、物価史は明清史では異端だったということですか。

岸本：まあそうでしょうね。でも田中先生も浜下さんも「物価は面白い」と励ましてくれましたよ。いろいろ教えていただきました。

伊藤：先生の「清代前期江南の米価動向」が『史学雑誌』に掲載されたのが1978年で、定期的に少し前になりますが、1960年代に計量的方法の潮流が『アナル』の第二世代の人たちを中心に起こりましたよね。先生はその影響を受けられたんですか。

岸本：テーマを選ぶ時にはぜんぜんそういうものがあるということすら、『アナル』のAの字も知らなかったんじゃないでしょうかね。ただ修士論文を書いているときに、「ああこういう話があるんだなあ」と。

近藤：『アナル』じゃなくても、たとえばイギリスで出てる『エコノミック・ヒストリー・リビュー』という雑誌は、やはり60年代から70年代前半まではほとんど計量的な論文ばかりですよ。僕も大学院に入ってすぐくらいに定期購読者になったんだけど、つまらないんでやめちゃったら、80年代には社会史的なものがどんどん増えてきたんですよ（笑）。ちょっと『アナル』に遅れて出てくる。こちらは英語ですから、あらゆる分野の人に影響しますよね。アジア史関係の人もあるし…。

岸本：そうですか。でも修論当時にそういうのを読んだ覚えはないんですよ。私が修論を書いているときに西洋史のほうで面白いなあと思って読んだもので、赤羽裕さんっていうらっしゃるでしょう。大塚史学の直系でありながら、変動分析を取入れていこうというところがとても面白い感じがしました。

近藤：赤羽さんは遅塚（忠躬）さん、二宮（宏之）さんたちとほとんど同じ世代ですよ。

東大の先生になってすぐ死んじゃったから、本が出たのは亡くなった後じゃないですか。

伊藤：『アンシャン・レジーム論序説』ですね。

岸本：それともう一つ『低開発経済分析序説』。あの議論が中国に当てはまるとは思いませんでしたけど、構造分析と変動分析との総合とか、現代の経済発展論との関係とか、とても面白いと思いました。

伊藤：先生は最初修論でやられたような計量的なものを書かれていたわけなんですけど…。

岸本：計量っていっても大したことないですけど、足し算と引き算くらいですけど…（笑）。

伊藤：その後、社会史的な方向にグーッと傾斜していかれた契機について具体的にお話しいただけませんか。

岸本：戦後は社会を見る時に共同体ということをまず言う傾向がありました。つまり市民社会成立以前の共同体であると。ですから物価というものにたいしても、いまだ本来の形では成立していんだから、あまり研究してもしようがないというふうな感じがあったと思うんですね。そうした議論にたいして私は、いわゆる価値法則が貫徹しているかどうかということはさておいて、とにかく当時の人々が物価に関心を持って利害打算的に行動しているといいましょうか、たとえば自給的な経営をやるにしても、それは物価を睨んだうえの自給なんだ、というふうなことを言いたいと感じていました。ですからヨーロッパ史研究の流れとは方向が逆かもしれないけれども、むしろ明清時代の農民の利害打算的というか、ホモ・エコノミクスのなところを強調したいなというところがあったんですね。経済史についてはその方面でけっこう面白い研究ができそうだという感じはしていました。でも社会の方を見ると、ホモ・エコノミクスのには切れないところがいっぱいあるわけですよ。血縁団体が強いとか、そういうのはどう考えたらいいかかわからないところがあったんですけども。でもそういう方法的個人主義を、単に一般的抽象的な個人を単位として考えるんじゃないで、中国社会特有の行動様式を持った個人を基礎にして適用してみると、一見前近代的な社会団体も解けるんじゃないかとあるときから考え始めまして、そうしますとそっちの方が面白くなってしまったわけです。つまりホモ・エコノミクスのものを検出しようというよりはむしろ、その当時の人特有の行動パターンを経済も社会も含めて考えてみるということなんですね。

そういう変化の背景には、西洋史や東南アジア研究からの影響があると思いますし、それから中国自身を見ても、現代中国の社会の動きがそういう関心を喚起するような感じがありました。というのは文革が終わって、さあこれから開放政策だってやるわけでしょ。そこでは人間というのは利他的・共同体的な理念で動くものじゃないってことが、一時期われわれ中国史研究者にも感じられていたんですね。文革の時の理念とは違う利己的な人間行動を考えていこうと。

近藤：それは中国に人類の将来の萌芽を見た人たちからすると、一種の幻滅なわけでしょ。

岸本：そうですね。じゃあそれでうまくいったかということ、必ずしもそうではないんです

ね。むしろああいうかたちで開放政策がとられることによって、秩序が崩れるといいましょうか、いわゆる自由を享受しながら、力のある人はバンバン儲けるし、そうじゃない人々は落ちこぼれていってしまう。社会が求心力を失って、バラバラな無規範状態になってしまう。功利主義的な人間行動をパーッと解放すればそれでうまく行くのかといえば、ぜんぜんそうじゃないわけですよ。中国人自身がそういうなかでどうやって秩序というか共同性を作っていくのかという問題は、自由を求める方向と並行して同時に出てきてるという感じがします。6.4.の天安門事件の前の民主化運動にしても、それは一面では自由というか、西欧的な個人主義を求める運動であったかもしれないけど、でもあれだけ盛り上がったのは、自由を享受して勝手なことをやってる官僚ブローカーにたいして人民の共同の利害を守ろうという、共同性を追求する雰囲気があったと思うんですよ。そういう中国人が求める共同性のあり方とか、そういう問題の方が面白いような感じがしてきました。山根：いつごろからそういうことを考えるようになられたんですか。

岸本：潜在的には80年代初めからあったと思いますが、はっきりしてきたのは87年くらいからです。

伊藤：87年といいますと、「明末清初の地方社会と『世論』」を 歴研で発表された年ですね。

岸本：そうですね、それくらいからだと思いますね。

青木：岸本先生が最近、全体でなく権力関係、個人の行動といったレヴェルで議論されていることが、西洋史の方と議論できる共通の基盤になっていると思うんですが。

岸本：そんな高尚なものではないんですけども、共同性を論ずる場合にもいったん個人を経由して論じたいというんでしょうか、つまり中国社会は共同的な社会であるという議論は昔からずっとある議論であると思いますが、私はむしろ方法的に個人主義的なところから出発して、それじゃあどうやって個人が共同するのかというパターンとして、共同性を考えたいと思っています。西洋近代史の先生方は、まずホモ・エコノミクスのものを前提にしてそこから議論してきましたよね。

近藤：戦後歴史学がずっとそうでしたからね。

岸本：逆に中国史ではもともと自然生的な結合を重視してきたわけです。ですから西洋史におけるホモ・エコノミクス批判と中国史における共同体論批判とは出発点が違うんで、最初はすれちがってたという感じはあるんですけど。

近藤：戦後歴史学では、市民社会の前提ないしは近代社会の文明の前提として、それぞれの人間がアトム的な個人として現れるというふうに論じられるでしょ。僕らもそういうふうに教えられてきましたけど、それは言い過ぎなんでね。ヨーロッパで市民社会が最初に実現したとされているイギリスではとくに、ギルド制度が19世紀中頃まで続いているわけだし、それからアトム的な個人なんて今までいっぺんも実現したことがないんじゃないかな。クラブや団体に属したり、階級によって別のモチベーションを持ち、別の生き方

をしているわけですよ。そういういくつも層をなしている文化・文明としてヨーロッパ文明を見ていくには、やはり共同体的結合関係をちゃんと見ていかなければならない。そういう議論のなかでたとえばモラル・エコノミーという言葉がインパクトを持ったんだと思います。もちろん西洋史研究者のなかで反発する人たちはとても多いと思いますよ。一物一価の市民社会こそがヨーロッパ文明の本質なのであって、もし民衆のあいだにモラル・エコノミーがあってもそれは残滓であって、歴史家がいちいち挙げつらうのはおかしい、それこそ重箱の隅をつつくのに等しい、という議論は今に至るまでずっと続いているんじゃないですか。

山根：じゃあ、先生は戦後歴史学には最初から批判的だったんですか。

近藤：それはもう否定の対象でしたよ。だって本郷に進んだとき68年でしょ。東大闘争は大河内（一男）さんや加藤（一郎）さんなど、学長・当局者にたいする抗議行動でもあったけれど、戦後日本の学問のあり方にたいする異議申し立てでもあったわけだから。大塚・丸山（真男）アカデミズムや講座派・高橋（幸八郎）史学にたいする批判の意味合いがあったんですね。

山根：学部で中世都市史をやろうとしたときに、すでにそういう立場だったんですね。

近藤：「中世都市における共同性のありかた」ということでね。そうした共同性をアルプスの北と南とで比較してみようとか、イタリアでのポポロ・グラッソにたいするポポロ・ミヌートの対抗・拮抗にかんして研究文献が随分あるらしい、だからイタリア語も勉強なくっちゃなあ…、なんて考えながら本郷に進んだら、それより面白いことが始まっちゃって（笑）…。

青木：戦後歴史学といっても、戦後の中国史研究の場合は、西洋史ほどバーンとした一つの筋を打ち出してきたわけではなかったと思うんです。たとえば京都学派とそうでない人とのあいだの主張の開きが非常に大きいですよ。それはどこに原因があると思いますか。

岸本：やっぱり時代区分論ですね。西洋史ももちろん一枚岩だとは思いませんけれども、モデル自体が西洋史から出てきたものだから、どの時代が封建制かということについては、そんなにはかけ離れてないわけですよ。だけど中国史の場合はヨーロッパ・モデルを中国史に当てはめて時代区分をしようとしてきたわけですよ。ですから時代区分にしても、ヨーロッパの封建制に対応するような部分もあれば、むしろもっと後の時代に対応するようなものが中国史の同じ時代のなかにいっぱいあるわけです。そのどこを捉えるかによって時代区分論のうえで大きな違いが出てくるわけです。

近藤：ヨーロッパ史でも最近では東欧・南欧の研究がかなり盛んになってきて、そちらから見ると、英仏を中心に出来上がってきた西洋史の時代区分にたいする異議申し立てが随分あるわけですね。

青木：岸本先生が中国史の時代区分をあえてするとすれば、やはり滋賀秀三氏のように春秋戦国と清朝滅亡で分ける三分法を採用されますか。

岸本：そうですね、中国人自身の伝統的な分け方がまさにそうですからね。私も時代区分はそれに沿うのが正道だと思います。伝統的な中国人の時代区分は発展段階的には必ずしも捉えていないんですね。たとえば秦漢から清末を一つの郡県制の時代と捉えていて、そのなかに波があるという意味では各時代の特徴があるけれども、やっぱり一つの型のある社会と見ているんですね。

青木：そういう見方が停滞論として批判を受けるような状況が、今の中国史のなかにもありますか。

岸本：あるといえばあるんでしょうね。よく発展論対停滞論というふうに対立的に捉えられますけど、むしろ停滞論は発展段階論の裏返しなんですね。つまり本来歴史というのは植物が生長するごとく内発的に伸びていくものだという考え方があるからこそ、モデルに沿ったはっきりした発展の見られないような社会は、これは生命なき社会で、種じゃなくて石ころだ、というかたちで絶対的な停滞論で対比するわけでしょう。でもそもそも、そういう植物の生長のごとき定向的発展段階論を採らずに、ここにいろんな人々がいて問題が生じるたびにいろんな対応をして、それで世の中が手探りですこしづつ変わっていくんだというふうに捉えれば、なにもそういう内発的な発展がなくなつてべつに恥ずる必要はない。だから今の若い人の考え方は必ずしも発展段階論じゃないし、かといって絶対的な停滞論を唱えるわけでもない。社会の発展を植物の生長のごときイメージでは捉えていないってことじゃないかな。

3 モラル・エコノミー百家争鳴

伊藤：さっきモラル・エコノミーの話が出たんで伺いたいんですけど、先生方はそれについて触れられることは多いと思うんですが、モラル・エコノミーにかんするお二方の定義にちょっと違いが見られると思うんです。つまり乱暴にいうと、岸本先生の場合、スコットの定義するような利潤より生存を優先する生計の立て方ということですね。それにたいして近藤先生の場合は、E. P. トムスンが用いているように、民衆運動のさいにそれを正当化する歴史的な規範ということですよ。これは言葉だけ同じで中身は全然別だと思うんですが。

近藤：そうですね、スコットをはじめとするアジア史研究者がどこからその言葉を持ってきたかは分かりませんが…。E. P. トムスンが『パースト・アンド・プレズント』に「モラル・エコノミー」という題の長い論文を発表したのが71年です。71年は僕が大学院に入った年で、すぐ見ました。「なんか変な言葉だなあ」と思ったんですね。そのまえに（トムスンの）“The Making of the English Working Class”にも出ていたんですが、最初読んだときには（モラル・エコノミーという言葉に）気がつかなかった。たしか大学

院の柴田（三千雄）ゼミでその内容について報告したと思いますが、柴田さんは心を動かされたのかもしれませんが、僕は自分の言葉として使う気にならなかったですね。「道徳経済」なんて。

伊藤：ちょっと翻訳に困りますよね。

近藤：困りますよ。カタカナで「モラル・エコノミー」なんて字数を稼ぐのはイヤらしいような気がして。ですから僕は89年までに書いた論文では「モラル・エコノミー」なんて、自分の言葉としてはただの一度も使ってないですよ。それを使わなくても説明できると思っていたから。日本で「モラル・エコノミー」という言葉が普及するのは、83年、柴田さんの『近代世界と民衆運動』からじゃないですか。

岸本：私がいつごろその言葉を知ったかと申しますと、79年に、『思想』の「社会史特集」のなかで鼎談がありまして、そのなかでモラル・エコノミーという言葉が…。

近藤：柴田さんが言ったんだな。

岸本：それでその言葉に関心を持って、アメリカ人の友人に「モラル・エコノミーなんて話あるの？」って聞いたんですよ。そしたらその人もよく知らなくて、「ボブキンという人がそういうものを書いているから読みなさい」と言われまして。それで読んでみたら、モラル・エコノミー論批判なんですよ。

近藤：スコットを批判して…？

岸本：そうそう。私としてはボブキンのほうにシンパシーを感じました。つまり共同体論はもうたくさんだというか…。

近藤：たしかスコットの本が76年に出て、80年に東文研の『アジア史研究』にその紹介が出てますね。日本の研究史ではそっちのほうが（西洋史より）早いかな。

山根：日本史はどうですか。安丸（良夫）さんとか？

近藤：安丸さんは（トムスンの）「モラル・エコノミー」論文をご自分で読まれたはずですよ。さきほどの『思想』の「社会史特集」のための研究会が77年に始まったんですが、そこには安丸さん、網野（善彦）さん、石井進さんとかいたし、西洋史では柴田さん、二宮さん、阿部謹也さん、それから社会学の高橋徹さん、宮島喬さん、杉山光信さんとか、そういう人たちがいて、僕が文字どおり末席をけがしていたんですね。

伊藤：錚々たる顔ぶれですね。

近藤：それがきっかけかどうか知りませんが、とにかく安丸さんはご自分で読んでました。でも日本史の人たちが話題にしはじめたのは、やっぱり『近代世界と民衆運動』じゃないですか。あれはずいぶん日本史の人たちが読んでいたわけでしょう。岩波のシリーズ『世界史への問い』の企画で、柴田さんから「おまえ、モラル・エコノミーを論ぜよ」と、これ御下命だったんです。僕は、「モラル・エコノミーだけで論じるのは嫌だ。シャリヴァリ論でいこう」と。こういう妥協の産物なんですよ。そうした不満の雰囲気は、『世界史への問い』のまえ、1989年の『思想』に（柴田さんの）『パリのフランス革命』を最近の歴

史研究のコンテクストのなかにおいて、「政治文化の社会史にむけて」として論じたのに出ていますけどね。あの論文には、「モラル・エコノミーはいろんな語源が合わさってきた、トムスの思いついた言葉であって、なかなか難しいんだ、自分の言葉としては使えない、ただこの企画の役割上仕方なく書くんだ」なんてセンテンスがもともとあったんです（笑）。あまりに言い訳っぽいからやめたの（笑）。分析の言葉としていいのかどうか、今でもちょっと疑問ですね。ただ読者の想像力を刺激して、いろんなことを考えはじめる機縁にはなりますよね。キャッチフレーズとしてはいいかもしれません。基本的にはスコットから始まった人たちの使い方と、トムスをはじめとする西洋史の人たちの使い方とは、ずれたまま来ているわけで、そういう面でちょっと不幸な事態ですね。

山根：でも二つの用法はホモ・エコノミクスという考え方への批判という点では共通していますね。

岸本：そうですね、はいはい。

近藤：トムスの影響を受けた人たちは、あくまで民衆運動を説明する原理として使っているわけですね。他方スコットたちは、*peasant economy* とか、*subsistence economy* の文脈で使っていて、民衆運動とはかぎらない…。

岸本：そうですね。でもスコットもボブキンも、あの本では経済よりは政治や農民反乱のことをおもに扱っているわけですからね。けれど、今おっしゃったずれというのが一種面白いところじゃないかなあ、という気もしているんです。私も90年に「モラル・エコノミー論と中国社会研究」なんて銘打ったものを『思想』に書かせていただきましたんで…。

近藤：書き出しがとても辛辣で、僕は襟を正しましたよ。

岸本：いえいえ、そんな、すみません（笑）。

近藤：「自分自身と格闘することなく、次々と新しい思想へと軽快に乗り換えてゆくことのできる「優等生」日本に対する、竹内好以来の自己嫌悪感は、日本の中国史研究者の心の中に、現在もこびりついている。」

岸本：あれは自己防衛のためでしてね（笑）。西川正雄先生とかがいろいろおっしゃっていることですから。

近藤：西川さんも、横文字やカタカナの言葉を使えばいいんじゃないんだ、とおっしゃっていますけれども、まったくその通りですね。

岸本：正直なところを言いますと、あの近藤先生の『思想』の政治文化の論文は、「アジア史研究者はモラル・エコノミーという概念を正しく理解していないんじゃないか」というご叱責みたいに感じられたんです。それは正しいんだろうけれども、でもだからといって、東洋史研究者が正しいモラル・エコノミーの内容を理解したうえで、それを使えばいいかということ、そんな問題でもないだろうというか…。あのご論文は、東洋史の方に球を投げてくださったという感じがしましたね。それをただ投げられているだけじゃメンツが立たないというわけで（笑）、おこがましいながらも球を投げ返したいというのがありま

した。あそこでも少し書きましたけれども、東洋史というか中国史研究者が、たとえばスコットを読んでも、まず面白いと思うのは、いわゆる「経済学」の部分だと思うんですよ。いままで共同体とってきたけれども、じつはあれは非常に合理的な行動なんだ、ということですね。このことはチャヤノフなども言ってますけど。

近藤：ロシア史研究のほうでも、それなりに再評価されているようですね。

岸本：チャヤノフはモラル・エコノミストというか、資本主義との違いを強調するサブシステンス・エコノミーの代表的な学者というふうに言われることもあるけれども、かれ自身はロシアの農民は資本家よりも典型的なホモ・エコノミクスだ、と言っているわけです。農民というのはきわめて合理的なんだと。そういうほうがむしろ、東洋史研究者にとっては新鮮な議論でして。

近藤：トムスンの使い方でも、「モラル・エコノミー」に対比されているのは、「マーケット・エコノミー」というわけではないんですよ。18世紀のイギリスは、完全に市場経済が浸透した社会だったというのは前提なんです。そのなかでの、民衆の両極分解に抵抗する小生産者たちのメンタリティを説明する原理として、かれは使っていた。その場合にトムスンが対比させるのは、「ポリティカル・エコノミー」です。だから、アダム・スミスのような人たちが自由放任論を唱える、で資本家的経営がどんどん大きくなっていく、小生産者が零落していく、という世の中の新しい動きを放っておくようなことにたいする抵抗の原理として、モラル・エコノミーを考えているわけです。

岸本：よく覚えていないんですけど、トムスンの論文のなかに、局地的市場圏という言葉は使っていなかったと思いますが、小規模な市場…。

近藤：ローカルな、たがいに顔を見知った社会。

岸本：古き良き小規模市場経済を守るんだという話がありましたよね。

近藤：はい、ローカルな経済を守るということは、要するに、仲買人や資本家たちがほとほとどの経営をしていれば、（小生産者は）なにも敵対しないですよ。それがナショナル、あるいはインターナショナルな範囲に、商取引や経営をどんどん拡大していくとなると、抵抗するわけです。でも経済史の観点からすると過渡期であって、過渡期の状態をそのまま維持しようということだから、無理な話なんですね。

岸本：そうですね。スコットを読んで面白いと思う反面で、あんな単純な話でいいの、と思うところがあるんですよ。やっぱりスコットの場合は人間の本来の姿としてモラル・エコノミーが昔からズドンとあって、それが資本主義によって壊されてしまう、という発想があると思うんですけども、やっぱりどうもそうじゃないんじゃないか。つまりたとえばヴェトナムの村落は、商品経済にも眼を向けた農民たちが自己防衛のために、状況に応じて微妙に形成したものであって、ズドンと本源的な姿としてあるってものじゃないんじゃないかって…。まあ違和感はすごく感じますね。

4 やっぱり過渡期が好き

近藤：イギリスにかぎらずヨーロッパでは、18世紀末から19世紀初めにかけて、いろいろなユートピア運動が始まります。18世紀には宗教的な、メソヂストなどの影響を受けていたのが多かったんですが、19世紀に入るとロバート・オーウェンに見られるように脱宗教化した運動が増えてくるわけです。それがベースとし、かつ実現させようとしたのは、やはりローカルでほどほどの、伝統的な人間関係を大切にしたい共同体でした。でもそれは商品経済を続けるし、共同体内で生産したものを他と交換することにも積極的なんです。そういうユートピア運動につながっていくんですね。

岸本：するとそういう過渡期的な意味で一番面白いとお感じになるのは、やはり18世紀ですか。

近藤：いや、どの時代も面白いんじゃないですか。今度、高校教科書をやってみて、先史時代も含めて面白いなあと思いました。エリザベス朝も19世紀末も過渡期として面白い。18世紀はそのなかの一つでしかないんですね。

伊藤：たしかにどの時代も多かれ少なかれ過渡期的な側面はあると思うんですが、近藤先生はどうして、そのなかでも18世紀という時代を専門になさったのですか。

近藤：いろいろ理由はあったかもしれないけれど、一つははっきりしていたのは、18世紀史というのは穴だったんですよ。イギリス史の場合、17世紀の市民革命、それから19世紀のヴィクトリア朝は、経済史も政治史も盛んに行なわれていた。ところが18世紀史はほとんどやられていなかった。文学史のほうでは夏目漱石以来の蓄積があるけれど…。それはイギリスでも意識されていて、70年代に18世紀史をやらねばならないということになって、こちらとしてもやりやすかったという事情はありますね。二番目に、18世紀というとアンシャン・レジームからフランス革命期の面白い研究ができるわけだし、日本にも柴田・二宮・遅塚という三人の立派な先生がいらして、それで何だか（18世紀に）近づいてしまったんですね。かつてイギリス史をやる場合には二つの古典的なテーマがあって、言うまでもなくピューリタン革命をどう見るかということと、産業革命をどう見るかということでした。産業革命は単なる技術革新ではなくて、17世紀以来の危機の克服の連続の結果として、また世界秩序のなかで生じた現象なんですね。まあいろんな理由が重なったんですけれども…。

それから18世紀には土地勘というか時代勘があって…。僕のヨーロッパ・イメージの原型は音楽なんです。音楽にとって18世紀後半は決定的に重要なわけです。バロックから古典派、そしてロマン派へ転換していくもっとも面白い時代で、中学生でも知っている音楽家たちがつぎつぎに出てくるわけでしょう。18世紀前半から後半にかけて音楽のトーンの転換があって、ベートーヴェンの作品をみても、1800年ちょうどに第一シンフォニーが出て、

がらっと響きが変わったとかいうのは、感覚的に知っていました。

伊藤：文学の分野でも、18世紀のイギリスは独特の雰囲気がありますよね。フランスの啓蒙主義的なものとも一味違った…。

近藤：あの、18世紀英文学の本質は、古典主義時代という訳され方もするけれども、古典をおちよくるということなんで、風刺の時代なんです。ギリシア・ローマ、あるいはルネサンスの古典を前提として、それをおちよくるような作品をみんなが楽しんでいたわけです。僕がよく使うホーガースの『ヒューディブラス』も、セルバンテスの『ドン・キホーテ』がベースにあって、それをみんなが読んでいることが前提で、それをパロっているんですね。そういう意味でかなり成熟した時代ですよ。

伊藤：同じことは明清についても言えるんじゃないかと思うんですが。やはり成熟した時代ですし、一種の転換期ですよ。

岸本：そうなんですね。ただ、明清の場合は産業社会への転換期とはちょっと言えませんからね。過渡期として面白いのは、秩序問題が出てくる時代は、16世紀から17世紀の明清交代期なんですよ。やっぱりそれには世界的な商業化の波というものがある程度かかっていることも確かだと思いますけども。明末の16世紀ぐらいから、「世の中悪くなった、悪くなった」と当時の中国人が言っているわけです。従来の上下関係が崩れるわ、みんなが利欲に走るわ、村落はバラバラになるわ、ということで、ある意味じゃ実力主義の自由な時代なんですけど、その反面いろんな形で集団形成があって、社会が一挙に饒舌になるし、熱に浮かされたような人恋しさがみなぎっている時代なんですね。男どうしが意気投合すると、たちまち義兄弟の契りを結ぶとか…。

伊藤：一種の任侠というか…。

岸本：そうですね。任侠的結合ね。それは明清とは限らずに昔からありますし、三国志の桃園の契りもそうなんですけど、そういう故事をふまえつつ契りを結ぶし、男女の恋愛でも、教養のある芸妓とハンサムな文人が大恋愛をするなんてのも、この時代特有なところがありますね。

伊藤：ちょうど『金瓶梅』が出たころですね。

岸本：はい。一種ワーッと熱に浮かされている時代ですね。もともと私自身としては、もうちょっとソバーな時代がいいなと思ってたんですけど（笑）。でもやっぱり、個人がバラバラになりながら、むしろそれがゆえにグーッと結合していこうという衝動にある種のシンパシーを感じないわけではないんですよ（笑）。そういう意味から言いますと、どうも18世紀は落ちついてきてしましましてね。清朝も安定してきますし、昔の熱気がないですね。清朝人自身も、明末ってのはくだらん時代だったと思っているわけですよ。思想を見ても、例えば陽明学などは共同性というものを非常に哲学的に熱烈に論じようとするわけだけども、清朝の人々からみると、「なんでああいう空理空論をやらなきゃいかんのだ。もっと経典をまじめに研究しなきゃいかんじゃないか」ということになるわけで、そ

ういう意味からみますと、18世紀はおちついてしまった時代じゃないかな。

近藤：ヨーロッパの場合も、16～17世紀は大航海、ルネサンス、宗教改革の時代ですが、かなり野蛮で、外の世界へどんどん冒険・掠奪に出かけていくし、ヨーロッパのなかでも戦争や内乱がずーっと続くし、大変な時代ですよ。むしろ18世紀啓蒙の時代になってようやく、われわれがイメージとして持ってるようなヨーロッパ文明が確立するわけです。ミュシャブレードの『近代人の誕生』にもそれがはっきり出ていますね。日本史でも戦国時代から安土桃山ぐらいまでのバサラというか、カラフルでエネルギッシュな時代が、江戸中期以降になるとソフィステケイトされてるけれど、ちまちましたナショナリスティックなものになっていく。それは、世界史、少なくとも北半球では共通ですかね。

伊藤：そうですね。フランスでも17世紀中ごろのフロンドの乱くらいに断絶があるような気がしますね。それ以前はやはり世の中が騒然としていて、一種バロック的な感じがするんですが、それがルイ14世の親政期になると身体を規律化し感情を抑制するような古典主義的世界へ移行していくわけですから。

岸本：西洋モデルじゃいかんという話は近年中国史の方じゃいっぱいありまして、たとえば溝口（雄三）先生は中国には中国自身の発展過程があると強調される。それは当然なんですけど、いまおっしゃったように横に切って考えてみますと、16世紀～17世紀の一種ワーッとした雰囲気の中で、対応の仕方は違うけど同じような問題があったんじゃないか、そういう意味では、むしろ西洋史と東洋史をつなぐ問題関心は、当然あってしかるべきだという感じがしますけどね。

近藤：付け足しだけでも、ヨーロッパ・モデルといった場合にね、啓蒙の時代からフランス革命にかけてでき上がったヨーロッパ文明を念頭に置いて、みなさん語っているわけです。それからみると17世紀以前には異文化と見えるような、野蛮でエネルギッシュで後進的な社会があったわけですね、ヨーロッパにも。もう少し教科書でも強調しなきゃいけないことですよね。

岸本：ピューリタニズムとか社会契約論とかいうのも、やっぱりそういう意味じゃ荒くたい世界のなかで出てきた話なんだと思うんですけどね。ただ後から振り返って、あれが近代のもとだったという位置づけをやっちゃうでしょ。そういう意味からみますと、私、ピューリタニズムとか社会契約論と、たとえば明末の陽明学とを、まさにコンテンポラリーな問題としてパラレルに考えることができるんじゃないかなと思ってんですけど。

5 東と西の互酬関係

伊藤：お話をうかがっていて、北半球全体に通じる壮大な問題を提起するためにも、東洋史と西洋史との対話が必要だと感じたんですが、その点で先生方はお互いにどんな学問的

影響を受けているんですか。

岸本：お互いということはないですよ。私が、一方的に影響を受けているだけで…。

近藤：岸本さんの場合は中国史だからということではなくて、とにかく読んで面白いと思ったんですよ。それと教科書を一緒に作るようになって、ちょっとした片言隻句に、「ああそうなのか」ってね。いろんなインスピレーションを刺激されるような発言があったりすると、ますます勉強しなくちゃなって思いますしね。

岸本：ほんとに、ご本とかを近藤先生から頂くばかりで、私はほとんど差し上げるものがないんですよ。全然互酬性が成立していないわけなんですけど…。近藤先生がいろいろアジア史研究にも関心を持ってくださるというのが、私、ほんとにありがたいと思ってまして（笑）。

伊藤：近藤先生は岸本先生のお仕事以外のアジア史研究一般から、どんな影響を受けておられるのでしょうか。

近藤：アジア史のなかに日本史も含めれば、江戸時代から明治の頃までの研究は面白いと思ってます。中世史もそりゃ面白くないとは言わないけど、いろいろイメージできないことがありますから。安丸良夫さんのお仕事は、これは早くから影響を受けましたよ。

『日本の近代化と民衆思想』が74年に出たとき、すぐに来てもらいました、西洋史研究室に。いま考えるとかなり大胆なことだね、面識もない第一線の研究者に手紙を書いて、「合評会をするから来てください」と。お礼も何も差し上げなかったし、お忙しかったに違いないんだけど、今から考えると感激しますね。もっとイスラム研究とか、あるいはイギリスをやってるんだからインドから学ぶべきなんだろうけど、それは今までのところ、こちらが不勉強で縁がなかった。でも、これから勉強していきたいと思っています。

伊藤：『世界史への問い』シリーズにも、アジア史にかんする面白い論文がたくさん載っていましたね。

近藤：そうそう。東洋史の研究者が西洋史から学ぶなんておっしゃってたけれど、西洋史をやってる日本人っていろいろ無知なんです。西洋のことばかり勉強してて、アジアのことを知らない。だから『世界史への問い』のような読み易いかたちで出ると、読んでほんとに面白いですね。「こんな同じようなことがあるのか」とか、「こういう問題だったら、こう論じたらどうなんだろう」とか。

青木：先生方はお互いの分野の研究にかんして注文とか、こういうところを具体的に明らかにしてほしいという点はありますか。

近藤：岸本さんということではなくて、一般的な日本のアジア史研究者、日本史研究者も含めて、西洋史研究にたいするイメージがありますよね。ステレオタイプ化されているような気がしますけど、ヨーロッパ、特に西ヨーロッパの近代史がモデルであって、それを西洋史研究者はいまでもって後生大事に守っているかのように誤解されることがあるけれども、それはもうずいぶん前に卒業しているわけだね。院生レヴェルではもう全然モデル

の意識はないでしょう。だから固定観念をはずしたところで対話したいですね。最初にそういうふうには構えられちゃうと、ちょっとこう話が続かなくなっちゃうんですよね（笑）。岸本：そうですね。まえに「イスラムの都市性」というプロジェクトがありましたけれども、あれも当初やっぱり西洋史の議論をある種固定化してしまって、それを批判するようなところが、ちょっとありましたね。でもおそらく西洋史の現状はそうじゃないんでしょうね。いま中国史研究は、日本でもアメリカでもヨーロッパ・モデルというか、ユーロセントリズムから脱却しようとしていて、チャイナ・センタードな研究をしなくちゃいかんと言っているわけなんですけど、でもそれがヨーロッパ史と切り離されちゃうということだったら、ほんとにつまらないと思うんですね。もっとヨーロッパ史のことをまともに勉強したうえでいろんなことを考えた方がいいんじゃないかって思いますね。そうは言っても専門に研究出来るわけじゃありませんから、こういうところが西洋史の現状なんだということが手軽にわかる方法はないかな。つまり、戦後歴史学の場合は良くも悪くも一つのバーンとした、これを勉強すればいいみたいなものがあったわけでしょう。

近藤：研究者も少なかったです（笑）。

岸本：ただ、今の西洋史研究はいろいろ面白そうな話があるんだけど、ちょっとつかみどころがない感じはあるわけですよ。研究の全貌が今ひとつよくわからない。それは逆にいえば、東洋史の側でもヨーロッパ史に、「ちゃんとモデルをつくってください」と要求するだけじゃなくて、西洋史の方々からみて面白いような議論が出てくればいいんですが。

伊藤：アジア史とヨーロッパ史が相互に影響を受けるにあたって、相手の地域研究に魅力的な理論が使われていたとして、それを自分のフィールドで使おうと思ったりする場合、その理論が自分の地域にかんしてそれまで蓄積された実証研究と合わないことがあると思うんです。そういう場合、どのようにして対処すればいいんでしょうか。

岸本：東洋史のを西洋史でお使いになるというのは、まずないでしょうね。それはおもに東洋史の問題かもしれない。でも私は理論をまじめに勉強して適用しようとか、そういう気もともとあんまりないので、困ったなと思ったことはあんまりないんですけどね。むしろ、ヨーロッパ史のなかで自然に使われているような概念が、往々にして中国史と合わなかったりするわけですよ。その合わないところが面白いところだなあと、今はそう余裕を持って考えられるようになりました。やっぱり、昔は合わないところを研究者自身が無理に合わせようとしたし、やっぱり合わせなくちゃいかんだ、というプレッシャーがあったわけですけど、今はあまりそういうことなくてね。中国はずれてるから特殊だとかいうことじゃなくて、そのずれの面白さに関心を持てるような状況になってきたのは、すごくいいことじゃないかなと思いますけど。

伊藤：そういえば岸本先生は、今までの歴史家が使わなかったようなユニークな用語をキーワードとして使ってらっしゃいますよね。「場」とか、「ゲームのルール」とか…。そういう場合、どんな学問分野からヒントを得られているんですか。

岸本：そうですね、まともに勉強しててそういう言葉を使うのならいいんですが、みんな聞きかじりで申し訳ないんですけれども。私自身は社会科学の方法論にはわりあい興味があるんですよ。ただわれわれは理論家ではないし、そうなるつもりもないから、キチッと勉強して使っているというよりは、むしろ一種のメタファーとして使っているわけです。中国のことをいろいろやっててそこで感じたイメージを、どんなレトリックでもいいから他人に伝えられるように工夫をすればいいんじゃないかと思いますね。たとえば「権力」とか「発展」とかいう言葉にしたって、みんなメタファーみたいなもので、かなり曖昧に使ってるでしょ。そしたらメタファーだってことをはっきり言ってね、それで論ずるならそれはそれでいいんじゃないかと。

青木：研究のアプローチとして、ほかにディシプリンを考えるとしたら社会学ですか。

岸本：そうですね。私はどうも、ひとつのメソッドに殉じようという気が全然ないんですよ（笑）。やっぱり歴史学の楽しいところは、まずなにかメソッドを身につけてそれからやろうというんじゃなくて、なんでもいいからとにかく違う世界やいろんな現象にたいして直接に感受性を全開にして、それで使えるものはみんな使っていきましょう、みたいな雑食的なところがあるでしょう。そこが歴史学の楽しいところというか、歴史学的な知性の少なくともかろうじて誇れるところじゃないかと思っているんですけどね（笑）。

青木：好みという点で、たとえば経済学のなかで好きな方法論はありますか。

岸本：そうですね、好みはありますねえ。ケインズが古典派を批判する仕方にはすごくシンパシーを感じますね。つまり現実から遊離して理論を立てて説教するというんじゃなくて、ひじょうに現実的なところに立脚して、それをグーッと理論にしていこう、みたいな感じは好きだなあ。

近藤：そうすると哲学のような理論的な学問よりは、社会学とかケインズとか、経験的な学問からの影響を受けたということですか。

岸本：そうです。哲学は、たとえばヘーゲルとかそういうのは、私、全然お呼びじゃなくて困るんですけれども（笑）。ただ現象学とかなら…。

近藤：たとえば今のポスト・モダンとかはずいぶん議論されていますが、僕にはなかなか難しくてフォローできないんですが。

岸本：うーん。つまり哲学をやろうというのか、哲学のほうから現実に向かっていこうとは全然思わないんですね。哲学だってやっぱり現実的な関心から出てきたものだとなれば、面白いものであろうとは思いますがね。

青木：岸本先生は昔カール・ポパーを読まれていたということでしたね。

岸本：そうそう。それはまさにいろいろ悩んでいた頃の話です。ポパーの歴史主義批判を読みまして、ほんとうに気が楽になりました。つまり必然的発展論にたいする、ああいう形でのじつにパワフルな批判もあるんだ、世の中にはいろいろな考え方があるなあと思いましたね。

近藤：そういう点では僕はまだ脱マルクス主義はしていなくてね。単線的歴史観批判とかいうことを言いながら、でも大きなところで僕の歴史観はまだ修正マルクス主義（笑）。人間の顔をしたマルクス主義だなあ（笑）。

伊藤：マルクスの著作のなかで先生が一番好きなのは、やっぱり『ドイツ・イデオロギー』ですか。それとも『経哲草稿』…？

近藤：いやいや、『資本論』ですよ、『資本論』（笑）。あれは出だしからきわめて哲学的で、人間論 — 人と人とのあいだの関係論 — で始まっていてね。商品関係をペテロとパウロのあいだの人間関係として説明したり。若いとき、二十歳前後に読むと、ああいう論理の力にはみんな動かされちゃうんじゃないかな。

岸本：マルクス主義で納得できないのは、発展段階論だけですね。私はほんとうに生かじりで申し訳ないんですが、『資本論』みたいな経済理論は好きですね。

近藤：脱マルクスという点ではね、たとえば柴田先生は大学院の演習で第一インターの議事録をやったことがあるんですよ。議事録を読むと、マルクスとエンゲルスが政治的に会議を引っかきまわして、自分の側の意見が多数派をとれるように相手をつぶしにかかる、いかにイヤな人間か、ということをもう叩きこまれちゃった。それから家庭人としてもマルクスはいろいろな問題があったらしい。それはそうなんだけれども、でもかれの頭脳の産物は偉大である。それとこれとは別だ、と考えるほかないですね。もうちょっと魅力的な人だったらよかったんですけど（笑）。

岸本：いわゆる戦後中国史学にしても、今の学生さんにはあまり人気がないことは分かってますが、私自身はもっと戦後中国史学に正面から取り組んでもらいたいと思っているんです。あのスケールの大きさといい、それから実証的な努力もあるし。私自身が唯一反発を感じるころは、「我にこそ真理あり」みたいな、一種高みに立った態度ですね。戦後中国史学のすべてがそうだとは言いませんが、ちょっと共通する文体があるんですね。

他人にたいする攻撃的な皮肉な感じは、マルクスやレーニン自身の文章の上にもあるわけですが、ああいうオリジナルなことを自分で言った人から見て、他人が馬鹿に見えるのは仕方のないことだと思いますね。とくにレーニンみたいに生きるか死ぬかという状況のなかでは当然だと思いますけど、やっぱり研究者としてマルクスなんかの語調やスタイルで得意がるのはちょっと、という感じがしますね。

近藤：今マルクスはあまり流行らないと思いますが、でも僕の世界観、歴史観を支えるのは何かっていったら、マルクスの考え方なんですね。

ちょっと話が戻るけれども、西洋史と東洋史が互いにどういうところから学ぶかといえど、たしかに西洋史は理論の点では東洋史から影響されることは少ないかもしれないけれども、具体的なことで眼を開かれるんですね。たとえば印刷技術や本の歴史というところからグーテンベルクから話を起こすのが普通になってるけれど、じつは東洋ではるか以前から印刷術はあるわけだし、インクにしろ紙の質にしろ東洋のほうが断然いいわけですよ。ヨ

ヨーロッパのインクなんて 200年もたつともう読めなくなったりするわけで。西洋史をやっていると、そういうことを忘れちゃうんですね。

岸本：なるほど、そういうことあるわね。

近藤：うん、そういうことが何かの機会に具体的なデータとして突きつけられると、眼の覚める思いがしますね。ヨーロッパは16世紀までは野蛮な世界なんで、それが大航海時代に豊かでソフィスティケートされたアジア社会と接して、それを真似しながら近代のヨーロッパが形成されはじめるわけですね。そういうふうなヨーロッパ史の位置づけ直しはヨーロッパだけでやっていたらダメなんで、アジア史との関係でやらなくちゃいけないような気がしますね。

そもそも歴史学は具体的な学問だから、具体的にこうだったと言うことで読者や同僚にインパクトを与えるわけですね。理論には流行りすたりがあっても、そういう実証的に明らかにした事象は残るわけです。あるいは政治的に違う立場の人の研究からも、学ぶことはできる。西洋史と東洋史との関係でもそうだし、ほかのディシプリンの仕事についても具体的に面白ければそれを採用してくるし、それこそ「アプロプリアション」ですよ。

伊藤：「横領」ですね。

近藤：「アプロプリアション」というのは「自己流に使う」という意味なんだね。自分の研究を面白いものにするというのは、ほかの分野の人たちがそれぞれ自己流に使える、盗めるものを提供するということでしょう。そういう意味では、E. P. トムスンがモラル・エコノミーという多義的な用語を使ったことによって、いろんな人のインスピレーションを刺激したわけで、そういう点では（トムスンの「モラル・エコノミー」は）かなり横領しがいのある論文といえますね。

6 日本歴史学界、開放是か否か。

青木：近藤先生はイギリスに留学されて研究はずっと進みましたか。

近藤：それは留学前と後では決定的に違いますよ。向こうで史料も見だし、向こうの教育の仕方とか、博士論文や著書をどうやって書いているか、それまで名前しか知らなかった人たちがどういう人物なのか、分かりましたね。それから留学から10年ぐらいたつと、そのころ大学院に一緒にいた連中が仰々しく本を出すわけですよ、オックスフォード・ユニヴァーシティ・プレスから。あんな奴がこういう本を出すのかって（笑）。日本で岩波や東大出版会から本を出したからと言って、特別にすごいことではない、それと同じように受け取れるようになった。それ以前は全然わからなくて、権威主義的におし頂くような感じがあったわけでしょう。憚りながら僕の名前をそういう本の註で見つれたりすると嬉しくなっちゃって、これはまだコンプレックスがあるわけだけども（笑）。

だから雑誌論文でも専門書でも、その背景にどういうことがあるのだろう、この註にはこう書いてあるけれども、もしかしたらごまかしじゃないか、あるいはたった5行の註をつけるのも大変だっただろうなあ、などと十分に想像できるようになりましたね。やはりある程度留学して、そのあいだに図書館や文書館に通うだけでなく、大学院生としてトレーニングを受けたから分かることだと思います。

岸本：私はじつは留学してないんですけれどね。中国に行くのは大好きだし、学生時代に留学しておくべきだったと思いますけれども。ただ史料的には日本で十分すぎるぐらいなんです。明清の場合は未刊行の文書が膨大にあるので、それを見に行こうと思えばやっぱり中国にいかないとダメですが、そういうものなしでも、もう日本だけでアップアップするほどありまして（笑）。

近藤：思い出しますが、ケインブリッジの図書館でいろいろカタログ引いていてびっくりしたのは、そこの中国関係のマイクロフィルムは、東京や京都に所蔵されている史料の写真で、北京などのはなかったわけですよ。70年代まではマイクロフィルムを取ったりできなかったわけですか。

岸本：そうですね。絶対量でいえばもちろん北京図書館のほうがものすごくたくさんあります。ただ中国では図書館を利用させてくれるシステムがまだそんなに整ってないですし。そういうところへ行って何がなんでも見ようという気も今一つないんですよ。

でもやっぱり留学している人にたいして、何とはなしにコンプレックスはありますね。

「おまえ見てないじゃないか」と言われれば、「そうですか」としか言えない（笑）。

伊藤：外国史研究の場合、たとえばイギリス史ですと、日本の研究者はイギリスの研究者にたいして、最初からハンディがありますよね。やはりイギリス人にとっては自国史ですから。その点中国史を日本人がやる場合、ちょっと事情が違うと思うんですが。

近藤：日本人の中国史研究の場合は、いわば合衆国の研究者がラテン・アメリカを研究する場合に似ていませんか。つまり現地へ行けばいろんな史料もあるし、インタビューもできるけれども、こっちのほうは歴史的に帝国主義的優位の立場にあって、必要な情報はこちらに集まっている、ということはありませんか。

岸本：そうですね。日本の中国史研究は、欧米の中国史研究と中国の中国史研究とよく言えば三つ巴の関係にありますね。日本にはそれこそ必要な情報が集まっていますが、ヨーロッパ史研究などの動向をとりいれて新しい方法をまずとるのはやはり欧米の研究者ですね。一方で中国には長い中国史学の伝統があり、むちゃくちゃ漢文の読める人がいる。そのはざまでは日本は新しい情報もちょっと入ってくるし、漢字に慣れているということもありますから、その有利さを生かしてもっと頑張らなくちゃいけないと思うんですけど、どうでしょうね（笑）。どうも、輝ける日本中国史学とは言い難くなってきましたね。

山根：中国史の場合、欧米や中国の研究者が日本語の研究を利用することはよくあるんですか。

岸本：そういうこともありますね。ただアメリカ人が日本語の論文を引くときにちょっと悔しいと思うのは、アーギュメントを本当に面白いと思って引くというよりはむしろ、日本人が一生懸命開発した原料を利用するというのか…。つまり日本人が集めてきた史料を欧米人が加工するということはわりに多いような気がします。日本語の論文を日本の学界動向に通じて読みこなしてくれてる人は本当に数えるぐらいしかないんじゃないかな。

山根：日本の西洋史じゃ考えられないことですね。

近藤：二宮さんもおっしゃっていたし、僕も感じることなんですが、われわれ日本人が英語やフランス語で発表してそれが引かれたりする場合、それは自分のベストの研究じゃないことが多いんだ。つまり基礎的なもの、ある史料を編纂したものであって、二宮さんの場合はイル・ド・フランスの豚の数を数えたものが引用されるとか（笑）。

岸本：そうなんですか（笑）。

近藤：「印紙税一揆覚え書」とか「フランス絶対王政の統治構造」のように、かれのアーギュメントが展開されているものは、日本語でしか書かれていないから引かれないわけでしょう。僕もイギリスではマンチェスタのローカルなことをやっている人としてのみ知られていて、民衆文化の研究者としては認識されていない。それはちょっと残念ですね。

岸本：でも主な研究論文を向こうの言葉で発表するというのには、なにか？

近藤：だって、力が入った研究論文にはかならずアーギュメントというかレトリックがあるわけでしょう。そのレトリックの部分を外国語で表現するのは難しいですよ。やっぱり母国語でなくちゃ表現できないでしょう。僕のシャリヴァリ論文なんてレトリックだけで出来ていたりするから（爆笑）。

山根：それに日本での議論や問題意識を理解しないと、何のことか分からないですからね。

近藤：ただね、そんなこと言っていないで、コメ問題じゃないけど、日本全体のコンテクストを理解するのは大変なんだ、わかんないだろう、だから出さない、というんじゃないで、一応そのまま直訳したようなものでも出して、向こうの反応を見るっていうふうにするべきなんでしょうね、本当は。それには時間がかかるし、そういうことにエネルギーを費やしているのが賢明かどうかという問題にもなってきますが。むしろ、日本の西洋史学界が確立もしているし完結もしているわけで、そのなかで高い評価を得ることがこれまでは大事でしたね、日本の大学に就職するためには。

岸本：中国史学界もそうじゃないですか。ある程度的人数がいて、論争が成り立ってしまっているところがありますね。アジア史の別の分野、インドとかイスラムとか、そういうところは外に向かって開放されているところがありますけど。

近藤：中世史で高山（博）君のように、向こうの『イングリッシュ・ヒストリカル・リビュー』のような雑誌に論文を載せれば、それはいいんですよ。そうでなくて単にどこかの大学で Ph.D. 論文を書いた、というだけだと、これは日本の学界では通用しにくいですよ。Ph.D. のなかには修士論文とあまり変わらないものもありますから。日本の歴史

関係の修士論文の水準は高くなりすぎたのかもしれない。

岸本：日本の中国史学界がわりと閉鎖的に成り立っているというのは、ある意味では鎖国状態みたいなところがありまして、今それを打破しなくちゃならないというような状況にあると思うんですけど。ただ私自身はむしろ日本の学界の一定の完結性とか求心性を逆手に取っていくべきじゃないか、という気もしてます。開国して海外の研究動向に眼を向けるのはいいけれど、アメリカの学界の問題関心に直接巻き込まれていって、日本がアメリカの学界のペリフェリーになるのではつまらないですからね。とくにアメリカナイズされた研究者と従来の方法を守る研究者とが、「二重経済」的に並存しているという状況にでもなったら悲しいですよ。日本の中国学界の一つのコアとしての求心性を守りつつ、日本の蓄積を踏まえた目玉とか売りを、海外にたいして戦略的にやっていかななくちゃいけないな、という感じはしているんですけどね。

近藤：長期的に観ますとね、あと10年か20年すれば確実に自動翻訳ソフトはかなりレベルが高くなると思うんです。しかも入力し直さなくてもスキャナーか何かで日本語をなぞっていけば英語なら英語に変わるというように…。そうなったときに恥ずかしくない論文を今書いておきたいですね。要するに、日本語がそうやって国際語になったときに、欧米の研究を引き写した、ないしは要約しただけの論文は存在理由がなくなる。将来10年か20年すれば絶対そうなると思うんだな。

伊藤：そういうふうに旧悪がばれたら恥ずかしいですよ。

近藤：そうそう。そういうときに、じつは日本でもヨーロッパ史研究は独特の構えで、1940年代ぐらいからそれなりに、少数だけれどもいい研究が出てたと、こういう問題視角も面白いじゃないか、というふうに再評価されることもあるだろうと思うんです。最近、史料のレベルも高まってきた、留学も増えてきた。だからといって独自のアーギュメントを立てている面白い研究が増えてきたかっていうと、それはまた別だね。量的に増えることはとてもいいことだとは思いますが、まだ質的にすごくよくなったということではないような気がしますね。

7 仁義無き戦い

伊藤：岸本先生は東大文学部では唯一の女性教官でいらっしゃるということで（インタビュー当時）、不躰ながら伺いますが、主婦業とご自身の研究を両立させるさいにいろいろ御苦労があると思うんですが…。

岸本：そうですね、よく「大変でしょう」と言われるんですが、全然両立してないんですね。両方とも寝てますから（笑）。やっぱり東大文学部の男性の先生方に比べると家事負担が多いことは確かですね。でも今はうちの亭主にもやってもらってますし、義母にも見

てもらってますから、そういう意味での不満はあまりないですね…。でも、たとえば御飯つくってるときに、「近藤先生は今頃勉強してらっしゃるのかなあ」と思って焦ることはありますね。

近藤：ハハハ。

岸本：ただ家事負担は半々でやってるわけですけど、位置づけは必ずしも対等じゃないといいましょうか、そこがちょっと不満なところがありますね。お茶大行ってから結婚したんですけど、それ以前の助手の時代はスムーズに就職できるとは思ってなかったんです。ですから亭主の厄介にならなきゃいけないかなっていうのもありましたから、一種保険をかけるようなつもりで、自分が家事負担をするという態度があったんですが、はからずも就職がうまく決まると（笑）…。まあつくづく夫婦関係は「仁義無き戦い」だと思いますね（一同爆笑）。この「仁義無き戦い」というのは、もとはお茶大のある先生の説なんですけどね。

近藤：僕は男の立場ですけど、パーマネントな職に就いてるかどうか夫婦関係では大きいんじゃないですか。僕は早く結婚しましたが、大学院生だったでしょ。女房は学校の先生やって、結婚から一年すると子供が生まれましたし、夫婦で時間が自由になるほうが家事を負担して当然というのではありませんね。とても対等なところまでは行きませんでしたけど、熟練を要しない仕事は僕がやるって感じでね、買物とか洗濯とかいうことはする。73年の第一次石油ショックで洗剤のないときは、その洗剤を求めて市川市じゅうを彷徨するとかいうことはありましたよ（笑）。ところが名古屋大学に行くときに、女房が仕事をやめないといけなくなって、今では僕がフルタイムの職でいろんな責任が生じると、家のことがなおざりになって…。たしかに「仁義無き戦い」だと思いますよ。そこをどこの夫婦もだましまし上手にやってるわけですよ。

岸本：ほんとにねえ。「両立の秘訣ってなんですか」って聞かれても、答えられないですよ。でもいま女性の院生の方にいたいのは、やっぱり女性はどうしてもハンディがありますから、院生時代にあまり楽観せずにできるところまでやっとならないといけないですね。いま女性だから（大学への）就職が難しいということはあるですか。

近藤：いやずいぶん変わりましたよ。80年代の初めまでは確かに大変だったと思います。男女は対等ではダメなんで、女性の能力がひとまわり上の場合にのみ採用されるということでした。それが80年代の終わりから変わってきたんじゃないですか。

岸本：ですから職業を持ちたいと思ったらそのつもりで、もう二股かけたりせずに、「これしか生きる道はないんだ」と、自分のやりたいことに向けて邁進されたいんじゃないかなって思ってるんです。

伊藤：最後に、これからのお仕事のご予定や今後の抱負をお聞かせください。

近藤：僕はそれなりに執筆の計画は混んでいます。共著共編というかたちでは何年かおきにポツポツ出ていくし、講座ものもありますけども、これが僕の仕事だというのをまだ出

してないので、それは今年中に出したいと思ってます。僕自身のなかでもうじゅうぶん成熟しきったテーマだと思うので、18世紀イギリスにおける民衆文化を歴史的な政治文化のなかで論じたい。山川出版社が大きなシリーズを出す企画をたてていますが、その一冊になります。それからこれまでの既発表の論文やエッセーや書評を組んで、単行本にするという計画もありますが、それは来年以降です。僕の研究のもう一つの柱として、18世紀のマンチェスターにおけるソシアビリテ、“Conflict and Control”という題なんですけど…。できれば英語で発表したいんですけど、イギリスで生活してないと英語力が落ちるんでなかなか大変です。それが僕のライフワークですね（笑）。

伊藤：乞うご期待ということですね。

近藤：ハハハ…。それと日本のイギリス史研究についてきちんと英語国民に知ってもらいたいこともあって、94年の夏にロンドンで国際学会をやるんですね、Anglo-Japanese Conference of Historians。僕も発表するんですが、日本におけるイギリス史研究が福沢諭吉からどういうふうに展開してきたか、『英国をみる』の「一日も早く文明開化の門に入らしめん」で書いたようなことを…。それは本になるはずですよ。

岸本：いいですねえ、先生はいっぱい予定があって。私は自分の研究の全貌をはじめから青写真のように作っていくって気がなかったんですよ。

近藤：僕もなかったですよ。でも40代の半ばになるとそれがなくっちゃ。

岸本：ほんと、そうなんですよね。編集者の方から「そろそろどうですか」と言われても困ってしまうんですよ。さっき経済史から社会史へ移ったとおっしゃったけれども、私自身はあまり移ったという気はないんです。

伊藤：ちょっと単純な図式でしたね。

岸本：ええ、関心としては共通している部分があるし、本業はまだ経済史だと思っていますから。経済史、とくに物価史については責任のあることを言わなくてはならない。だけどそうじゃない方は自由に問題提起をさせていただくということで…。今後の抱負といっても何も言えなくて申し訳ないんですけど（笑）、すこし初心にもどって、経済史の方で今までの論文をベースにして3～4年かけてまとめてみたいなあと思っています。

伊藤：社会史方面のお仕事もこれからも続けられるんですか。

岸本：そうですね。もうひとつのほうはまとめようとも思わず、「行方も知らぬ恋の道かな」でワーッと書きたいことを書こうかと…（一同爆笑）。

伊藤：どうも長い間ありがとうございました。

（きしもと みお・東京大学文学部助教授・中国明清史）

（こんどう かずひこ・東京大学文学部助教授・イギリス近代史）